



混迷する米国の中東政策

— 真のリスクは中東か —

【中東に異変あり】

東アジアの一特に北朝鮮のあわや第二次朝鮮戦争か一と思われた危機にも動じなかった世界経済だが、サウジアラビアの一連の肅清を機に再び地政学的リスクが意識されている。

もちろん、米国も見過ごしてはいなかった。実際、米国はティラーソン米国務長官が中東を歴訪。目的は北朝鮮と並び危険なイランに対抗する地域的枠組みに、歴史的なライバルであったイラクを取り込む事、更にカタールに対する禁輸措置を終了するようサウジアラビアを説得する事であった。いずれも、対イランの強力な包囲網を作るために重要なミッションであった。

だが、失敗した。それは何故か。

【IS亡き後米国の無策ぶりが明らかに】

「イスラム国（IS）」が事実上の首都としていたシリアのラッカが陥落。長く続いたISとの戦いは、ようやく収束に向かっている。米国の正規軍が主力としてイラク、シリアで展開されたわけではない。実際の戦闘の大半は現地勢力によって担われた。

だが、米国による強力な軍事支援がなければ、依然ISがこの地域に広大な占領地を維持していた可能性がある。実際、ISが2014年に勝利を重ねた事で、イラク、サウジアラビアは危機に陥った。両国はISが崩壊するまではじつと援助を受けていたが、今や自国の利害を最優先にしつつある。つまり、ISさえいなくなれば、どちらの政府も米国にあれこれ指図されたくない。

トランプ政権はオバマ政権との違いを強調するし、実際アジア太平洋地域の戦略は大きな違いがある。オバマー安倍政権が築き上げた中国包囲網はほぼ崩壊しつつある。

しかし、殊中東に関しては一イスラエルに対する大きなシンパシーという違いがあるとはいえ、両政権とも同原則を貫いた。最大の敵であるIS打倒に全ての資源を投入してきたのである。

結果としてそれは成功し、ISはほぼ地上から消えつつある。しかし「そのあと」をどうするかについては「何も決まっていない」状況が明らかになりつつある。「どうするべきか」「どうあるべきか」の原則はオバマ政権にもなかった。オバマ政権は中東の混乱が嫌いで、更にエネルギーに関しては米国がシェールオイルにより自給可能となった事で更に関心が落ちていった。

一方、トランプ政権はまだ中東に関心があるが、それはイスラエルの敵としての中東であり、イスラエル以外の国家間関係に重大な関心があるとは言えない。結果、イスラエル抜きの中東安定化策については「無策」あるいは重要な原則が決っていない一という状況であった。

【原則が無ければ結末は悲惨となる】

米国政府と、シア派主導でイランと同盟関係にあるイラク政府、またイラク領内のさまざまなクルド人政治組織との関係は常に不安定であった。米国的主要目的はIS打倒だけで、そのためには原則ともいえるものがあったが、ISの脅威が減るなかで、原則を失い、急速に悪化しつつある。9月にはクルド地域の独立を問う住民投票が行われたが、イラク政府はその後、クルド地域の都市キルクーク周辺の石油資源が豊富な地域に進出した。クルド人勢力とイラク政府軍のあいだで衝突も相次いだ。共通の敵が消えれば、目の前の歴史的な敵との戦いが始まるのである。

更に歴史的に戦いを続けているスンニ派・シア派間の反目も元に戻りつつある。

シリアでは、アサド政権を救おうというイラン、ロシアの企図が実質的に成功した。米国政府はこれを、安定性の確保とISに対する反撃のための代償として認めてきた。その一方、サウジアラビアに対しては、イエメンにおいてイラン政府と同盟関係にあるフーシ派の掃討を進める事を事実上黙認している。ここに原則はない。

【やっとスタートした対イラン包囲網】

それでも、ISの弱体化に伴い、トランプ政権は最近になって、イランへの対抗を米中東政策全般における最優先課題とした模様である。

北朝鮮との連携や、あからさまな反米主義は、トランプ政権をそのように仕向けてもおかしくないし、実際、アジア戦略とも違う。トランプ大統領が10月13日に前政権が交渉したイラン核合意を承認しないと発表し、米国がテロ支援組織に指定しているイラン革命防衛隊に対する新たな制裁が発表された。

問題は、トランプ政権が簡単に放棄しつつある対中国包囲網のような広範囲、かつ一枚岩の有志連合を生み出す事は、極めて困難であるという事である。

特に湾岸諸国は、統一的な連合とはとうてい言いがたい状態にある。サウジアラビア、アラブ首長国連邦が支持する対カタール禁輸措置は継続されており、これら3カ国すべてに重要な軍事基地を持つ米国は、リーダーシップが取れているとは言えない。

カタールがムスリム同胞団などの組織を支援しているという点に対して、近隣諸国は怒っており、この対立は米国政府が仲裁出来る領域を超てしまっている。

少なくとも、サウジアラビアはかかるのサウジアラビアではないようだ。更に、中東歴訪のもう1つの目的であるイラク政府の立場を反イランに転向させる事にも混迷してしまった。

IS打倒に関して、イラク政府はイランの支援を受けたシア派民兵に依存していた。ティラーソン氏がシア派民兵に対し、イランに帰国するよう求めた事は二重の意味で失敗であった。

一つは、シア派民兵に対する貢献をないがしろにしてしまった事。そしてもう一つは、シア派民兵のほとんどが実はシア派のイラク国民であったという事である。イラク国民に対して、イランに帰国しろというのは、違和感しか無いだろう。

結果として一ある意味伝統的でもある一米国の中東の現実に対する無知をあからさまにしてしまっただけであった。

【第3の選択】

しかし、中東諸国には一アジアの諸国が中国に寄り添うように一今やプーチン大統領率いるロシアに接近するという選択肢がある。

遠く19世紀末以来、米国の信頼できる同盟国であったトルコは、エルドアン大統領のもとで、ますます反米的な意識を強めている。エジプトの軍事政権も、引き続き米国から大量の支援を受けているとはいえ、独自性を主張する。唯一上手くいっているのは明らかにイスラエルシフトした事であろうか。

もっとも、トランプ政権の脇の甘さは、イスラエルが提供したISに関する機密情報をロシア外相に漏らし、イスラエル側を心配させている。イスラエルは、イランの影響力拡大とトランプ政権の予測しにくさに懸念を抱いており一おそらくそれは正解なのだろう一、特に湾岸諸国との独自の地域外交努力を強めていく可能性が高い。つまり、イスラエルですらも米国を唯一の選択肢とはしないのだ。

【真の危機はやはり中東からか】

結局、伝統的なクルド人勢力との対立、シア派、スンニ派の対立、イスラエルとの対立など高度な混乱要因が中東にあるといつてよい。そこにロシアが介入してくるのも同じパターンといえる。歴史的に覇権国がその安定に注力してきたが、実際には大英帝国も米国もうまくコントロール出来てきたとは言えない。

常に危機と崩壊は中東に起こりえた。北朝鮮リスクを過少に見積もる事は出来ないが、それでも米中ロシアのディールは完成できる見込みははるかにある。しかし現状、トランプ政権は中東に関するあらゆる選択肢が失敗に終わる可能性が高まっているように見える。ロシアの介入や、中国の介在など、新たなリスクも顕在化しつつある。

真の危機は、やはり中東からくる可能性が高いのだろう。

ブルーテクニカル

ショック安は終了か

11月9日、日経平均株価は25年ぶりの高値23,382を付けた後、先週は急落して一時22,000円を割り込んだ。その後は反発したものの、週末の引け値は22,396。乱高下模様の展開。

先週のテーマは「急落は拝み取り：現在は高値警戒感から急落を気にする向きもある。その可能性は否定できない。しかし高値から10%程度の下げに過ぎないだろう。来れば三段階で拾えるようにしておけばよい。ショック安が到来したとしても2万円前後は維持されよう。その意味では急落が入るたびに拝み取り」。

急落の入るタイミングは良かった。ただ、高値からの下げ率は6%。いざ急落は拝み取りーといつても買いのタイミングは難しい。下げを待てば待つほどに買えなくなる。「もう少し下がるのではないか。まだ早い。できるだけ安値を拾いたい」といった心情が働き、結局、買えなくなる。押し目待ちに押し目無し。しかし、一旦押しが入ると深い下げとなって買いを躊躇。そしていつの間にか反転してまた買えなくなる。なかなか難し

今週のいち押し

反騰はしているが…

前週からの米国株の下落は日本株の下落に飛び火し、その間ドル指数は売られ、短期米国債利回りは上昇(価格は下落)。ユーロの上昇は週初から加速。15日に1.1859まで上昇した。

先週の当欄ではユーロ／ドルに関してこう述べている“ただ、筆者はこの上げに懐疑的である。通常1度割り込んだネックラインを相場が再び上回ると、それまでの下げはダマシと見られるのだが、そもそもこの相場は1月3日の安値に起因するチャネルラインが現在も有効な上値抵抗として機能しているのではないかと筆者は考えている。また、本格的に買い転換するには9月以降の主要高値を結んだ上値抵抗を少なくとも引け値ベースで連続して上回る必要があるだろう。更に23日及び69日移動平均も上回る必要がある。ここまで挙げた上値抵抗が軒並み1.1750付近に集中している。…筆者は7日安値以降の反騰局面自体が大局的にダマシの上昇局面ではないかと考える。恐

高く仕入れて安値で投げる投資家から 脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
- けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
- で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望
- 銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長 足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）

いものである。こういった時には「高値はまた更新される」と考えて下げているところを三段階に分けて買うしかない。最安値を買おうとしないことだ。買えるものではない。

9月から新1年サイクルが始まったとすれば、少なくとも来年3月まで天井は打たない。長期スパンで見れば、11月9日の高値は小さな丘の頂に過ぎない。前回も述べた如く「20週移動平均が中期上昇トレンドをサポートする。今後、ショック安が入るたびに買って行くことだ」。今週、先週の安値を更新しなければ既に調整は終わっていることを示唆する。安値が更新されれば拝み取り。高値更新時の次の目標は23,482±508。



らく相場は今後長くて3～4週間、短くて今週中に1.1750付近を試し、そこから反落して1.1200付近を目指すのではないかと予測する。従ってこの水準に達したら10月高値以上の引け値にストップロスを入れて売り参入。ストップアウトしたら損切りドテン買いを推奨したい”。従って現在売り参入している。

現在9月高値に起因する上値抵抗も1.1750の壁も突破した。しかし、10月12日の高値1.1879も超えていなければ、先週末で1.1800付近にある69日移動平均も週の引け値ベースでは超えていない。15日スローストキャスティクスはこの2週間で急伸しており、買われ過ぎの領域に近づいている。

8月以降、この相場のチャートパターンは大小幾つかの三段パターンのネックラインがサポート＆レジスタンスになっていた。その発端は9月8日の高値を頭に8月31日と9月14日の安値を結んだネックラインを割り込んだ所からである。目先、10月高値を僅かに超えるかも知れないが、そこはネックライン部分。ここを引け値で超え切らなければ、相場は再度下降線を辿るのではないか。従って今週も上記の売り方針を踏襲する。



今週の相場風林語録

百年に九十九年の高安は、三割超えぬものと知るべし

これも、江戸時代のお米という場合において言えたことであるが、当時、このことを見つけたことは、さすが、たいしたものである。

今週の九星★波動

南雲 紫蘭

所詮、器にあらず。

残念ながら政治家としても陰謀家としても習近平とトランプでは大きな差があるようです。中国のあからさまな野望にもかかわらず、そして実際に中国に脅威を受けている多くの同盟国があるにもかかわらず、トランプ大統領はまるで田舎者が中国の都会に翻弄されるが如く、そう、まるで赤子の手をひねるようになじみました。

「中国のみなさん、美しい歓迎をありがとうございます！ファーストレディのメラニアと私は一生忘れないだろう！」。

まあ駄目ですね。中国とはディールに来たはずが、北朝鮮問題ではうまくはぐらかされ、巨額な一米国への投資で嬉しそうに目がクラクラしたのが目に浮かぶようです。所詮は世界最強の大統領の器ではなかったとしか言いようがありません。せっかくオバマ大統領と築き上げたTPP等の政治経済的な包囲網もすっかり崩壊。ついでに精神的に

相場指南道場

トレーダーあそなろ物語 (421)

中原 駿

「ミスター上野、香港の戦後の繁栄を支えた人たちは、どんな人間か知っていますか？」

香港一おそらく、亡命した本土人だろうか。

「本土から逃げてきた人たちですか？遠く上海や北京からも逃げてきたと聞いてます」

「その通りです」

ワン・メン・メンは深くうなづいた。自分を納得させているように見えた。

「香港の最高の料理人は上海から鍋を担いで泳いできたとも言われています。多くの人間が溺れてしまったり、命を落としたりしました。そうした人たちによって香港は支えられています。それではシンガポールはどうでしょう？」

第六感の



三尊形成を待つ

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

サイクルの起点を模索

ドル円相場は三尊天井パターンが見えてきた。ミニ三尊からラージ三尊へ。このパターンは実は最近のユーロドル相場でも見られた。ただドル円の右肩への反騰は物足りないが、ミニ三尊のネックラインブレイクからの下げの進行はラージ三尊の左ネックを試しているように見える。

ここにサブサイクルを加えると、右ネック形成時にボトム打ち、次の右肩狙いがサブサイクルの上昇期。右肩形成後は下げに転じてネックライン下抜け。

しかし、これは次のサブサイクルが弱気型になり、ラージ三尊のネックラインブレイク後はユーロドル相場のように反騰せず、そのままフリーフォールとなる恐れがある。

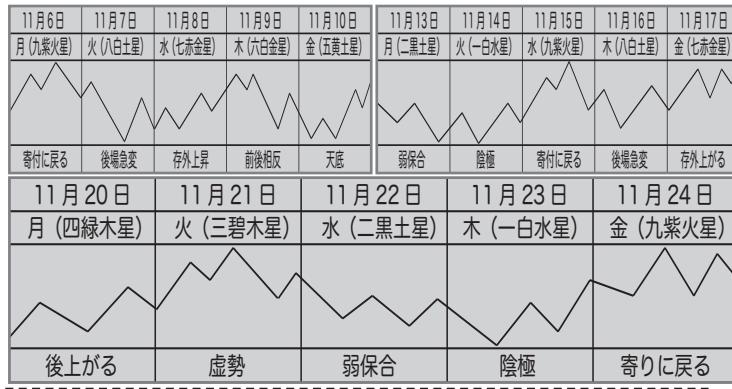
このシナリオは年末に向けてドル円の下げを示唆し、これまでのシナリオ—12月中旬に118円前後を付け、年末年始元の木彌型一と異なる。

今週はサブサイクルの11週目に入るが、先週次の通り述べた、「今後2週以内でボトムを探す場面に変わりはない。ピンポイントで探し当てるのは難しい。順張りでは次の高値更新が新サイクル入りを伝えよう。同時に3ポイント上値抵抗突破もボトム打ちを確認する。現在はボトム模索に入っている」。

ユーロと同じような三尊形成なら、サイクルのカウントを考えなさなければならない。今後右ネックを形成、その後の反

も持てかけたのですから残念としか言いようがありません。

さて九星波動は月盤《八白土星》も後半です。「後半急あり」という星、前半が上昇なら後半調整、前半が調整なら後半は上昇という星です。前半の上昇を考えると、後半はよもや、という下落もあり得るでしょう。特に9~10月にこれといった調整がなかったので、ここから年明け波乱には要注意でしょう。



ワン・メン・メンの顔は柔軟だが、目の奥は決して笑っていない。

「やはり人口では福建の人々でしょう。多くは出稼ぎで働いてきた人たちですが、シンガポールでは福建語はマンダリン（北京語）よりも標準的ですよね？」

「その通りです」

「では、付け加えることは？」

上野はハッとした。こうした追加の質問があるということは、ワン・メン・メンが福建人でないという可能性を示唆する。あるいは、その逆で福建人をしっかりと評価しろ、ということなのかも。だが、ここで上野は賭けに出ることにした。

「数は少ないですが、客家の方々の貢献も忘れるわけにはいきません。客家の人々は多くの危険を冒してシンガポールの発展に貢献してきました」

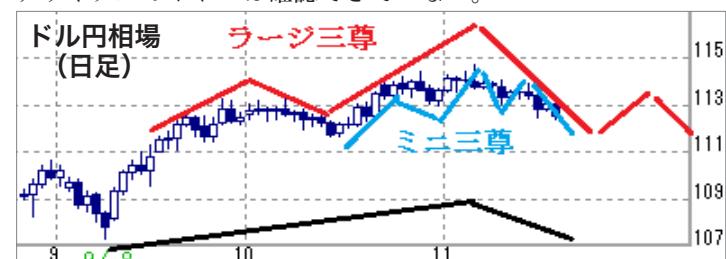
上野は、大きく息を吸い込んだ。

騰で右肩形成、もう一度反落してネックライン割れ。この急落で底を打つサイクルがあればベスト。ドル円のサブサイクルが12~13週に延長してボトムを付けるならあり得る。

ユーロドルの三尊パターンとサブサイクルは8月17日左ネックから始まった。11月7日でサブサイクルのボトムを打っていたとすれば、12週を要した。

ドル円が同じような軌道を描くとすれば、10月16日がサブサイクルの起点になる。ただし前サイクルが6週に短縮されたことになる。どちらをサイクルの起点にするか来週まで待ちたい。

先週のストラテジーはロングの一部を利食いしたが28日MAを下回ったので、残りも手仕舞いとなった。また「今週は112円台があれば買い直す。ストップは110.80以下の引け値に設定。もし28日MAを引け値で下回った場合、順張りで買うとすれば次の28日MA上抜けを狙っても良い。そして3ポイント上値抵抗を上抜けばさらに買い増し」。既にロングした投資家は今週一旦ストップアウトする。全ての投資家は3ポイント上値抵抗をブレイクしたところから買いを狙う。まだサブサイクルのボトムは確認できていない。



サイクルだけ話します。

—メリマン・サイクル理論 備忘録—

[第66回] ユーロ／ドル相場のサイクルについて(7)

前回の当欄で、ユーロ／ドル相場の前長期 16.5 年サイクル（2000 年 10 月 26 日～2017 年 1 月 3 日）は「コンビネーションパターン」、即ちこのサイクルは、2008 年 10 月 28 日の安値を節目に 99 カ月（8.25 年）サイクルで 2 分割されているとともに、2005 年 11 月 15 日、2010 年 6 月 7 日の安値をそれぞれの節目に 66 カ月（5.5 年）サイクルで 3 分割されている可能性を指摘しました。特に後者の位相は第 3（最終）位相が通常の日柄より延長したので、判断が難しかったと思われます。

また、前回の月足をご覧戴くとお判りのように、2008 年 10 月からの相場はサブサイクルもコンビネーションパターン。通常“99 カ月サイクルは 4.125 年（49.5 カ月）サイクル 2 つか、2.75 年（33 カ月）サイクル 3 つ”に分割されるのですが、歪ですが 1.83 年（22 カ月）サイクルが 4 つ入っていたように見えます。

ただ、現行 16.5 年サイクルはまだ 10 カ月目。サイクル序盤の日柄は歪み難く、前サイクルの起点である 2000 年 10 月からの日柄が参考になります。実際『フォーキャスト 2017』の移動平均はこの日柄に関連した 17 カ月と 26 カ月を用いています。

メリマン通信 —金融アストロロジーへの誘い—

水星逆行に備えよ

米国時間 16 日（日本時間 17 日）、金星・海王星トライン（120 度）が終了。ここは米国時間 12 月 2 日（日本時間 3 日）に発生する木星・海王星トラインと関係する金星トランスレーションの時間帯であった。日米株式市場は共にこのトランスレーション終了付近で反転上昇し、ユーロは対ドル、対円共に反転下落。ドル／円相場はここから下げを加速させている。

今週、何らかの反転ポイントになりそうな天体位相があるかどうか探してみたが、11 月 18 日の新月、19 日の火星・冥王星スクエア（90 度）、22 日の太陽の火星サインチェンジ程度で、どれも大転換に結び付きそうな天体位相ではなかった。従って、先週の流れがそのまま継続するように思える。特に株式市場は再度上昇し、日経平均は再度 11 月 9 日の高値を試しにかかるのではないかと思われる。そのチャレンジ場面は恐らく来週末から再来週頭。つまり木星・海王星トライン形成日付近だ。

予約受付中！

フォーキャスト 2018

「サイクル」「アストロロジー（占星学）」「テクニカル」の 3 本柱で
市場経済を読み解く分析集団、MMA（メリマン・マーケット・アナリスト）主宰、レイモンド・メリマン氏による年間予測本。
2017 年の目玉であった天体位相による「ザ・グレートリセット」は、
2018 年の世界を、そして市場をどのように動かしてゆくのか…。

レイモンド・A・メリマン著 秋山日搖香・投資日報編集部 訳
発行：投資日報出版 定価：8,100 円（税込・送料別）

お問い合わせ
お申し込みは：**投資日報出版(株)** まで

〒103-0013 東京都中央区人形町3-12GRANDE人形町6F 電話:03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444

2000 年 10 月安値を起点とした第 1～99 カ月サイクルは 33 カ月サイクルで 3 分割され、第 1～33 カ月サイクルは 11 カ月サイクル（9～13 カ月）で 3 分割されました。従って、現行相場が 2000 年起点の相場と同じように 3 つの 11 カ月サイクルで構成されているなら、現在は第 1～33 カ月サイクルのボトム形成場面という事になります。2001 年 7 月 5 日の安値を起点とした第 2～33 カ月サイクルは翌年 7 月 19 日まで 22.18% 上昇しました。執筆時点の安値は 11 月 7 日の 1.1554。ここがボトムなら 22% 上昇すると 1.4100 付近。これ踏まえ、次回は週足サイクルの検証から更に相場サイクル細かく分析します。



ただ、波乱はその 1 週間前から始まるを見る。いや、既に始まっているかも知れない。19 日の火星・冥王星スクエアは 12 月 1 日の火星・天王星オポジション（180 度）と対の関係。これは広義の天王星・冥王星スクエアへの火星トランスペリジョンだ。

更に重要なのは木星・海王星トライン発生から約 5 時間後、射手座の 29 度で水星逆行が始まる（日本時間で 3 日の 16 時 35 分から）。以前から記述のように、水星逆行は開始日、中間点、逆行終了日、シャドウ抜けの時間帯が相場の転換になりやすい。更に逆行 1 週間前から相場変動が荒くなる傾向がある。今回の逆行 1 週間前は 11 月 26 日（日曜日）。東京市場は 23 日が祝日なので、24 日、もしくは 27 日から相場展開に注意したい。

同様に、逆行中間点の 12 月 12 日（日本時間では 13 日）、逆行が終了（順行）する同月 22 日（日本時間 23 日）、シャドウ抜けの 2018 年 1 月 11 日も転換ポイントとして注意しておくべき時間である。私自身が描くジオコスミック的に理想な日経平均株価の展開は、先週からの反騰が 12 月 1 日から 4 日に終了し、シャドウ抜け付近で節目となる安値をつけるパターンであろう。

WEB サイトより一足早く、1 週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 11月20日(月) 火星・冥王星スクエアの影響を考える週
- 11月21日(火) 戦争、原発、核がテーマ
- 11月22日(水) 理想から現実の問題にテーマが変わる
- 11月23日(木) 欧米市場 突発的な動き
- 11月24日(金) 元の木阿弥
- 11月25日(土) 相場は賢くなるほどに下手になる
- 11月26日(日) 技術も必要だが心理面の鍛錬がより重要

フォーキャストのその先へ

【2018年新春勉強会】—2018年、如何に儲けるか—

四半期ごとに年 4 回開催しているこの勉強会。2018 年最初の勉強会では、前年の分析に加えて、2018 年の重要な相場サイクル、天体位相等、複合的な解説を実施！恒例の新年会も行います。

講師	日時	会場
<第1部> 何よりも早い「フォーキャスト 2018」ポイント解説	1月27日(土)13:00～19:00	貸会議室日本橋清新丹
株式会社投資日報社 林 知久		東京都中央区日本橋人形町 1-4-10 人形町センタービル 2 階
<第2部> 第一四半期、儲けの機会を探る		<一般>
株式会社投資日報社 代表取締役 鎌木 高明	14,040 円（税込）	<MMA 会員> 10,800 円（税込）

※お席に限りがありますのでお早めにお問い合わせください。
※お席に勝手なごあらわしや金の確認をもってお受け合なさざでございます。
※お預元子されたお客様には 1 月中初めてお会場にて案内地図配り送ります。

■ 詳細・お申し込みはこちから
(株)投資日報社 電話: 03-3669-0278 東京都中央区日本橋人形町3-12-11GRANDE人形町6階

<http://www.toushinippou.co.jp/>